



障碍をもつ幼児の保育(26)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)
房江 (F)

大気・天への憧れ

子どもにとつて大気はいろいろなよいものを含んでいます。空の高さを初めとし、光、風、雲、虹など子どもの感性に働きかけるものがあります。

心を高くあげる

F 一番小さいクラスにいたA君は三歳過ぎて、

やつと歩くようになりましたが尻餅をついてすとんと座ると、床に落ちている上履きやスリッパに手をのばして遊び始めました。床に顔をくっつけるようにして遊んでいましたが、やがて外に出て建物の間から差し込む太陽の光に手を上げたり、ほかの子のやっているシャボン玉を追いかけようと手を振つて

いる姿はとてもかわいく、忘れられません。私はこの子が天への思いを表しているようで、今も心に残っています。

M 幼い子どもは天国から来て間もないから、どの子も天国の香りを身にまとつているように思う。

前にも話したように、幼い孫が樋から流れ落ちる雨の水を不思議がつて『どこから?』と尋ねたので、雨は空から降つて来たことを話して、空の上には天があることを話したら『てん、てん』といながら長い棒を高く指し上げました。

F 心(思い)を高く上げることは、子どもの場合長い棒をもつて空に高く上げたりする遊びになりますね。それから自分が高いところに登つたり……。

大気は光を運んでくる

M ここで話をすることにためらいを感じるのだけれど、光というと去年の春十歳で天に召されたのちゃんについてどうしても話をしたいと思うのです。F ののちゃんの亡くなつたことは、みんなの心に深く残っています。でももう一度今回のテーマの光に触れて話してください。

M ののちゃんは愛育学園に在籍されていたのですが、家は遠く心臓が悪かつたので体調のよいときには学校に来ることにしていました。みんなに大事にされて、その中で素敵な絵や製作やゲームをしていました。途中ではほかの子のようにランドセルをしようって学校に行きたいという願いも聞き入れてもらつて、地元の学校にも在籍しました。そこでは運動会にも参加することも出来たのです。やがて病が重くなり、入院することとなりました。

大好きな先生たちは度々ののちゃんのベッドのわきで一緒に遊び、楽しいときを過ごしました。

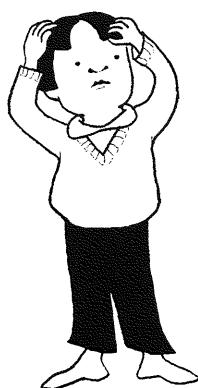
F いろいろな先生がその人らしいかかわりをしていたことは、話に聞いています。

M 私もお見舞いにいったけれど、ののちゃんにはもっと面白い遊び相手の若い先生がよくて、あまりお呼びでなかつたのです。年寄りの私には別のかかわりを求めていました。病が重くなり、病院で夜中に苦しくてお母さんもどうにもしてあげられなくて、親子で苦しんでいるとき、私はののちゃんの精神を支えることができないかと真面目に考えました。そんな時に、本屋さんで一冊の本が目にとまりました。『かみさま どこにいるの』というコインニア社から出版されているものです。小さな美しい本ですが、これをお母さんに読んでもらい看護婦さんや訪問の人にも何回も読んでもらつたということです。

病室に差し込む光

M この本の中から特に心に残っているところを読んでみましょうか。

『もし かみさまが どこにでも いるのなら、きみのポケットのなかにいるのかな——そうよ——じゃあ、かみさまを そのでにとつて みせてくれないかな——そんなことできないわ。だつて かみさまは てにとるには おおきすぎるし、それに、ゆびのあいだを するつとぬけちゃうくらい ちいさすぎるわ』



『かみさまって、なにを きて いるの —

されました。

ひかりを き て いる んだよ』

『なぜ かみさまは きみのところに きたの

—— だつて、わたしが、びょうきだつたから
よ』

この本をくりかえし読んでもらつて、朝になつて
朝の光が差し込んで来たときに『神様がきた!』と
いつたそ うです。それから一日後にののちゃんは天
に召されました。

医療が進歩したとはいえ、死がなくなつたわけで
はありません。子どもの死もまた身近に起ります。
死に直面して、大人も子どもも神様のことを真剣
に考えるのですね。

F 夜、暗い中でどうしようもないほど体のつらさ
と不安とを、子どもが抱えているとき、親もつら
かつたけれど朝の光が差し込むとほつとして、ああ
また今日も生きて……と思つたとお母さんが後に話

F ののちゃんの前夜祭（お通夜）は、家が遠いこ
ともあつて、ののちゃんが大好きだつた愛育でしま
した。

私もそこに出席しましたが、孫とその母親も一緒に
に会場に向かいました。それまで降つていた雨が上
がつて陽がさしてきましたとき大きな虹が空いっぱいに
かかりました。そのときの孫の感動は本当に深く
て、『虹』という言葉を知らないので何と表現して
よいか分からず、腕をいっぱいに振りながら『こー
んな、こーんな』と表していました。それから後
も、この道を通るたびに『こーんな』と手を上にの
ばして虹のことを話すのです。

M 前夜祭に来ていた人達は『あの虹にのつて、の
のちゃんは天に召されたのだろう』と話していました

た。虹というのは天と地とのあいだにかかる橋だと昔から神話にあります。幼い子どもの感動にはそれとにたよくな思いがあると考へていいのでしょうか。

物語を紡ぐ

M この子の虹の体験は、物語を自分から紡ぐことの始まりだったと思います。どの子どもも自分の物語を紡ぎつつ生きている。ののちゃんも自分の物語をもつてているのです。それはいろいろな人に彩られ、本当に華やかです。自分の孫の物語と重ねて考

えることにためらいつつも、光を仰ぎ見て子どもが生きるという点では共通のものを感じているのでここでお話をしました。

F 幼い子どもの小さな行動は日常のささいなことのように見えても、子ども自身にとっては、つながりのある物語なのですね。

M その通りです。ことに言葉を話す以前の子どもは、心にいっぱい思いをもついても言葉で表現できなかから、身振りや象徴的な行動で表すのですね。

F そう考へると思い当たることがいろいろありますね。

M ののちゃんの病気と絵本の話はあまりに深く大きなものを与えてくれたので、これ以上付け加えることは出来ないのですが、絵本には光、風、雲、雨、虹など、大気をテーマにしたものがたくさんありますね。

最近、私は体を動かして遊ぶのが困難な子どもたちに出会って、本を朗読することを試みています。そうすると呼吸や食事も困難な子どもが目を皿のようにして私を見つめているのです。大人が精神を高められるような本は、言葉を話さない子どもにも訴える力をもつています。